海外協定校長期派遣留学報告書（日本語）　　（様式⑪）
A4，3～5 枚

学籍番号：12725007	氏名：立花　知寛
学部学科名：地域環境科学研究科	
留学先学校名　オスナブリュック応用科学大学	

1. 留学の目的

3 年前にイギリスに語学留学をしており、そこでの色々な国の人との出会いや話を通じて自分の中の世界が広がるような感覚に楽しさを覚えた。帰国後、自分の専攻である造園を海外で学び、話し合うような経験をしたいなと思っており、偶然昨年からオスナブリュックでの留学が可能という話を伺い、どこか縁を感じたことをきっかけに協定校であるオスナブリュックへの留学を目指した。

留学の目的は、主に 3 点あった。第一に、専攻する造園の授業を英語で受講し、グループワークを通じて異なる文化・背景を持つ人と議論・協働する力を培うことである。イギリスでの語学留学の際もディスカッションする機会は多くあったが、自身の専攻する学問に近しい議題に触れることはなく、自身のアイデアを伝えることはあっても、偶発的に思いついたものをその場で発言しあうもので、自身の分析や知識、経験等から核心を持って議論の中でひとつのものを完成させるという体験はできなかった。そのため、今回の留学では、自分の意見に自信を持ち、相手の話も取り入れながら提案を行うことを目標としていた。

第二の目的は、人として成長することである。オスナブリュックの学生は昨年 2 月に大学に訪れていたため、友達や知り合いは何人かいたが、日本での生活と比較し、環境、生活スタイル、人脈といままで当たり前だったものがリセットされ、新しく構築するような体験の場でもあると思う。その中で一から現地での生活の仕方や交友関係の築き方、助け合うという経験を通じて、改めて生きるうえで大切にすべきこと、自分を見つめなおすきっかけにしたいと考えていた。

最後は、自身の研究の現地調査を実施するためである。ドイツは、先進国のなかでも環境意識が強く、制度やシステムが整備されたような環境先進国の一つと認識している。そこで、現地を実際に見て、体験することで日本との違いや独特な視点は何かを捉えることを目標としていた。

2. 現地での生活について
（住居、キャンパス、友達との交流、余暇の過ごし方など）

住居は、5 人でキッチン、シャワー、トイレを共有する寮に住んでいた。農学系のキャンパスからは徒歩とバスで 40 分ほど、自転車で 25－30 分ほどのロケーションにあり、近くにはスーパーがあった。交換留学生は、その他４つの寮がありそれぞれに振り分けられていたが、それぞれ男女で共同生活が主であった。

キャンパスはHasteと呼ばれる農学系のキャンパスで基本的に授業を受講していた。Haste は森の中にあるようなキャンパスで敷地も広く、自然豊かな環境で学ぶことができた。Haste 以外にも経済系の学生のためのキャンパスである Caprivi や工学系の Westerberg など学部によってキャンパスが分かれていた。図書館は、Westerberg と Haste にあり、その他学習スペースはどのキャンパスでも充実していた。また、Mensa と呼ばれる食堂もそれぞれのキャンパスにあり、値段も 2-4€でおなか一杯になるほど食べることができた。メニューも毎日変わり、三種類ほどのメインが日替わりであり、サイドディッシュも自由にとるような形式であった。

授業がない日は、グループワークのミーティングがあったり、ない日は Neumarkt にあるバスで 20 分、自転車では 10 分ほどでいける距離にあった図書館でタスクをこなしたり、自習時間に充てることが主だった。
授業後やレジャー時間は、近所にある小さいサッカー場で友人の留学生や現地のこどもたちとサッカーをする日や公園でピクニックをして夕飯を共にするなどして交流し、交友関係を深めていた。国・文化の異なる人との交友関係を深めていく際には、相手を否定せず受け入れる寛容さはもちろん、人の目・顔を見ること、笑顔は意識していた。日本食を振る舞ったり、日本のお菓子を配ったりするだけでも良いきっかけになったと思う。また、誘われたらできるだけ行くことを意識することで交友関係を広げることができたと思う。

ドイツでは、オクトーバーフェストやクリスマスマーケットが冬学期に開催される大きなイベントでそれぞれ参加したり、街によって雰囲気が違うため違う街も訪れたりと違いを楽しんだ。違う都市に行く際も、Deutschland ticket を所有していたため、RE と呼ばれる地域電車に乗ればプラスでお金を払うこともなく訪れることができた。

3. 留学を通じて学んだこと

まず、グループワークを通じて異なる文化・背景を持つ人と議論・協働するにあたり、受け身にならず自分の大事だと思ったことは引かずに主張することの重要性を学んだ。グループワークの当初は、遠慮やためらうこともあり、自分が引いてしまうこともあった。しかし、自分が疑問に思ったことや違う意見だった時に質問したり、違う意見を提示することで議論が起こり、アイデアが膨らんだり、より全員が納得できる提案にブラッシュアップできたと実感している。加えて、自身のやる気をみせることにもつながり、チームメイトとの信頼や友好関係を築くことにも繋がった。素直に疑問に思ったことを聞いたり、自分のアイデアを主張するには、その背景となる理由や自分の意見を常に持つ必要があり、そのためにミーティング前や日ごろから考えたり、準備することが改めて重要だと実感した。

次に語学に関しては、英語の伝え方の重要性を学んだ。自分のアイデアや意見を共有する際（特にプレゼンの際）に、同じ内容でも順序だった説明をするか、しないかで伝わり方、明瞭さが大きく変わると気付いた。例えば、自分の中でアイデアがあり、伝えるときに理由をこのような利点があり、このような効果もあるという

ように伝えるのではなく、結論（アイデア）を伝え、理由を順に分けて、3 点あります。一つ目はA…。二つ目はB…。最後にC…。というように工夫するだけで相手の理解度が大きく変わるように実感した。

勉学に関しては、現地の学生や留学生の日本庭園への強い関心があることを体感し、日本庭園の文化や歴史のユニークさ、可能性を感じることができたのも大きな学びであった。日本庭園を持つ家が減少してきており、造園業のかたちも変化しつつあると感じてきていたが、海外での作庭やインバウンドでの文化の体験の場としての需要に加え、幾何学的で抽象的なデザイン要素や構成要素の多様性が瞑想やこころの健康に役立つのではないかという機能的な視点も含め、改めて日本庭園への想いと可能性を認識することができたのは大きな学びであった。

最後に、ほぼゼロから人脈を作り、慣れない環境で生活したことで自身について学ぶことができたように感じている。コミュニケーション能力には自信があり、積極的に自己紹介や会話をスタートすることは出来たが、グループができているところには中々飛び込むことができなかったりと新たな一面を知ることが出来たりと自分が客観的に浮き彫りになる機会が多かったように感じる。グループワークの中でも、自分は何ができて、何ができないのかを客観視し、できないことを悲観するのではなく、受け入れてチームのためにできることは何か考えながら取り組めたことはとても良い経験になった。

4. 留学経験を今後どのように活かしていきたいか

まず今年は、夏に研究室で国際プロジェクトがあるので、提携校とのメールでのやり取りやミーティング等の準備とファシリテーターとしての役割を全うし、プロジェクトを充実したものにできるよう貢献していきたい。また、農大に留学生として留学にくる生徒たちとの交友関係を築き、何かサポートもできればと思っている。語学に限らないことでいえば、慣れない環境でわからないことを自ら調べたり、相談したり、課題を解決した経験を活かして、より主体的に研究やプロジェクトを進めることができるよう精力的に取り組んでいきたい。

将来的には、具体的にこの道に進むというのは決め切れておらず、いつ・どのように特に語学力を活かすことができるかわからないが、今回の留学で培った異なる文化・背景を持つ人と議論・協働する力と自身のある語学力を活かして、日本庭園の魅力を国外に発信したり、体験してもらえる場の創出に携わることや、国外の技術やアイデアを学び続け、日本でも取り入れたり、海外の人と協働することができる造園家として、地元である石川県の地域課題の解決やポテンシャルをより引き出す、持続可能で快適でより魅力ある街にできるように尽力したいと考えている。それを実現するには、語学の勉強の継続、広くアンテナを張りその時代や先のニーズの予測、造園の学びを続け、深めていくことが重要だと思うので、卒業までの学生期間はもちろん、卒業後も継続していきたい。